

月の花挽歌～3.月光值千金～

3 - 9

母屋の北側に下屋が降ろされ、江戸の匂いがする柱廊となっていた。

酒の香が仄かに漂い、虫が鳴いていた。

「あ、まんまる！」と真紀。

「これぞ中秋の名月！」と麻里子。

「東京とは、どこか違う」

「姨捨の月ですもの」

浮かれ調子の二人の女は回廊を少し東へ進み、別棟にある従業員食堂へ渡って行った。

軽口をたたいていた賄い婦と蔵人は、麻里子に紹介されるより先に、真紀の美しい見目形に押し黙った。

「鮎を塩焼きにしてください。後は私がやります」と麻里子は賄い婦に言い置いて、厨房へ入った。

「秋口の雌の鮎は、脂がのって美味しいんですよ」

真紀とおない年くらいの賄い婦は、気後れしながらも、にっこり笑ってお愛想を言う。

「ありがとうございます。いつかテレビ番組で千曲川の友釣りを見たことがあります」

「今頃は投網で獲ったりもするんですよ」

「とあみ？」

「手で持った網を、こうやってパーンと広げて投げる……」

「ああ、わかりました」

二人のやり取りを黙って聞いていた若い蔵人が、照れ臭そうに「じゃ、俺はこれで」と会釈して立ち去った。

真紀が所在無げに小奇麗な調理場を見回していると、W酒造の屋号を染め抜いた法被を羽織った数人の女が軽口を交わしながら入ってきた。みんな真紀の存在に一瞬たじろいだが、真紀の方から自己紹介をすると、てんでに型通りの挨拶をし始めた。

「ご苦労様。思ったより忙しかったわね?」

麻里子が厨房から出できて、女達にねぎらいの言葉をかけた。

「ほんと、今年の観月祭効果は半端じゃなかったです！」

彼女らの中の一人が、飯をよそう手を休めて相槌を打った。

ご飯をよそう者、味噌汁を注ぐ者、おかずを揃える者、お茶を入れる者まで、無駄のない動きで準備し終えた彼女らは（いただきます）とハモってから一斉に食べ始めた。

内心、体育会系さながらのシーンの一部始終を可笑しがっている真紀に、「さあ食べましょう！」と麻里子は声高に言って、賄い婦と運んできた鮎の塩焼き、ウルカ（鮎の腸の塩漬け）、熱燗、白瓜の粕漬けなどをテーブルに並べた。